地 域 経 済 ウォッチング

いわき民報 2011 年 1 月 27 日（木曜日）

「大学生の力を活用した集落活性化事業」塙町矢塚区のケース（上）

―地域ぐるみで分校を盛り立てる開拓者の気風―

廃校に伴う環境悪化の中、持続的発展は可能か

東日本国際大学経済情報学部教授/地域経済・福祉研究所長

福迫　昌之

少子高齢化、人口減少、財政危機、景気低迷等々、日本が抱える様々な問題に共通するのは、地方においてより深刻であるということだ。首都圏よりも地方、地方においては都市部よりも中山間地でそれが顕著であることは言うまでもない。

福島県では、過疎・中山間地域の集落の活性化を目的に、昨年度から大学生グループに調査を委託する「大学生の力を活用した集落活性化事業」を行っている。いわき市においても立正大学の学生が川前地区に調査に入り、農業体験や農産物の販売などの活動を行っている。

今年度も県内外の大学から 10 グループが県内の中山間地に調査に入り、様々な活動を行った。東日本国際大学では、経済情報学部の学生有志による地域まちづくり研究グループが塙町矢塚区の調査を行った。

ご存知の方もいるだろうが、塙町は茨城県に隣接する人口約 11,000 人、ダリアで有名な県東南の小都市で、中山間地を多く抱える。いわき市からもほど近い位置にあるが、交通アクセスが決して良いとはいえないため、いわき市民にとって馴染み深い町とは言い難いかも

しれない。昨年 10 月に国道 289 号荷路夫バイパスが開通したことによって自動車のアクセスは良くなったが、それでもまだ物理的な距離以上に遠い町である。

今回調査に入った矢塚区は、塙町の中心地から車で 30 分、人口が 35 戸世帯 111 人、標高 700m の山間の小集落である。夏が涼しいのは良いとして、区民が「北海道に負けない」と豪語する極寒の冬は、いわき市とは別世界の様相を呈するという。地区内には商店やなどがないため、自家用車かかろうじて存続しているバスで町の中心地に出かけるしかない。地理的にはむしろ矢祭町、あるいは茨城県の高萩市に近く、実際に通勤している区民も少なくない。

そもそも今回調査に入ることになったのは、矢塚区長を中心とする区民有志が地域づくり活動に取り組み始めたことによるが、そのきっかけは区内の片貝小学校矢塚分校が廃校になることであった。さらにその本校も廃校になり、別の地区の小学校に統合される予定であり、児童は家から離れた遠い学校に通学せざるを得なくなる。少子化が進む中、子供の教育環境が悪化することは地区にとって致命的といっても過言ではない。

地域活性化という観点から、客観的条件を並べれば有利な要素は少ないと言わざるを得ない。この地域で持続的発展を図ることは可能か、さらに言えば意味があるのかという根本的な問いは、人口減少が続く多くの過疎地域に共通する問題であるが、問いかける力さえ残っていない地域も少なくないのが現状である。

その中で矢塚区はいくつか興味深い特徴を有する地域であり、それは一筋の光明であると言えるかもしれない。

例えば、矢塚区ではこれまで何もやってこなかったかといえば、むしろ他地域よりも献身的に様々な活動を行っており、そのベースとなるのが、分校、そしてその PTA である。小規模集落ゆえに親子 2 代で PTA 会長を務めた家も珍しくなく、とくに近年は子供を媒介に、そして

子供たちのために様々な行事を地区ぐるみで行ってきた。その意味で、分校の廃校は区民にとって大きな衝撃だったろう。

こうした分校を中心としたコミュニティは、矢塚区が開拓地であったことと無関係ではないかもしれない。矢塚区は、戦後入植して木炭製造などを生業にした人々が開拓した地区で、そのため地域活性化のカギとなる歴史的遺産には乏しい。逆に、教会こそないものの、地区ぐるみで学校を盛りたてる姿は、「大草原の小さな家」を彷彿とさせる開拓者の気風であるようにも思われる。今回の調査で、入植時を知る第一世代の高齢者の話を聞く機会があったが、自然条件に恵まれないこの地での苦労と深い愛着は胸を打った。同時にこの開拓精神は、伝統的部落にはないものではないかとも感じた。

無論豊かな自然も魅力的な資源だ。手つかずの自然、澄んだ空気、澄んだ水、豊富な山の幸と高原野菜など、都会にはない魅力がある。ただそのどれもが、オンリーワンの魅力を持っているかとなれば疑問である。またその量でいえば、広大ないわき市の比ではない。

こうした地区に調査に入った学生たちが何を感じたか、次回はそれらについて報告してみたい。